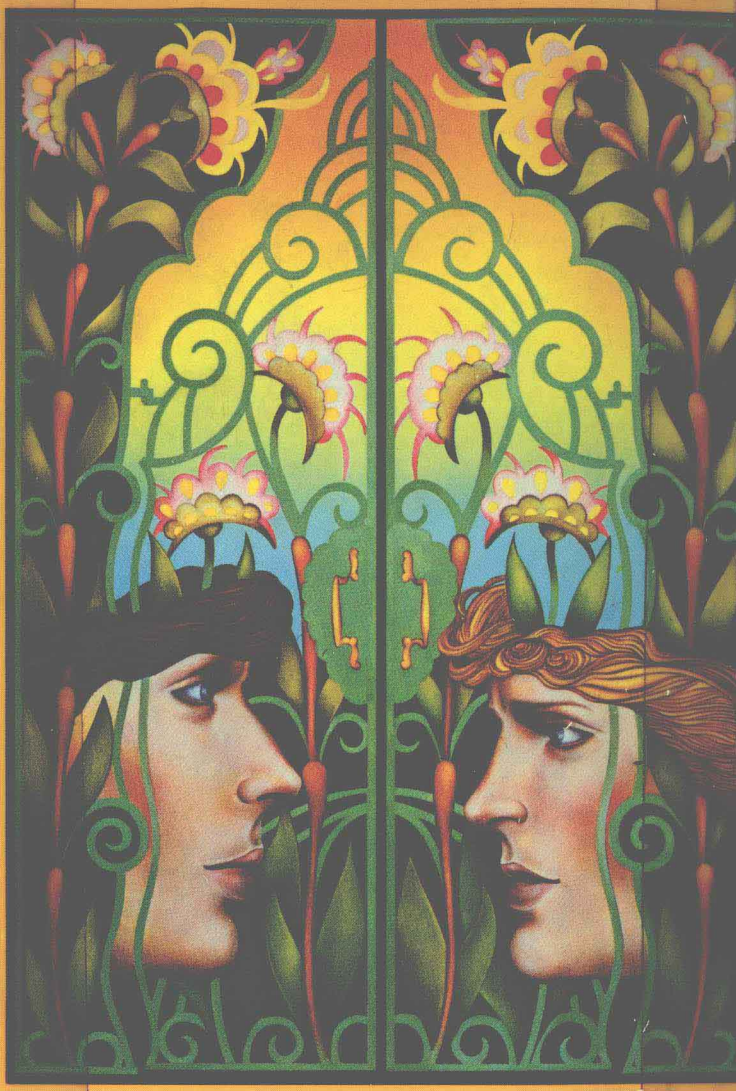
THE BEGINNING PLACE

始まりの場所

アーシュラ・K・ル・グィン——小尾芙佐訳



早川書房

THE BEGINNING PLACE

始まりの場所

アーシュラ・K・ル・グィン
小尾芙佐訳

海外SFノヴェルズ

早川書房

THE BEGINNING PLACE
by Ursula K. LeGuin
Copyright © 1980
by Ursula K. LeGuin
First published 1984 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Virginia Kidd Literary Agent
through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

検印
廃止

始まりの場所
昭和59年2月29日　初版発行

著　者　U・K・ル・グィン
訳　者　小尾芙佐
発行者　早川　清

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(252)3111(代表)
振替　東京・6-47799

印刷　株式会社亨有堂印刷所
製本　株式会社　明光社

定価　1300円
0397-880620-6942

始まりの場所

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ガンジス河を流れてゆく
この水はどこから来たのか？

——J・L・ボルヘス
「ヘラクレイトス」

1

「七番レジ入ります！」レジのあいだに入ってカートから品物をとる、リンゴが三つ、八十九セント、特売のカット・パイナップル、脂肪分二パーセントの牛乳半ガロン、五ドル頂戴して、おかえしは一ドルと七十五セント、まいどありい、週六日十時から六時。手なれたものだ。マネージャーは、まるで鉄粉と胆汁でつくったような男、有能だとほめてくれる。他のレジ係はみんな年上、世帯もちで、話といえば野球、フットボール、ローン、歯ならびの矯正の話。みんな彼をロッジと呼び、ドナだけがバックと呼ぶ。店がたてこむときの客はただの手だ、金をさしだす手、そして受けとる手。ひまなときはじいさんばあさんが話しかけてくるが、どう受けこたえしたってかまわない、相手は聞いてなんかいやしない。有能なのは毎日の仕事のあいだだけ、その先はそうはいかない。一日八時間、チキンヌードル二箇六十九セント、特売ドッグフード、ホイップクリーム半パイント、しめて三十三ドル五セント、四十ドル頂戴して、おつりは、はい五ドル札と一ドルと九十五セントのあけくれ。樫谷（オークバリー）通りへ歩いてかえると母親を相手に晩めしを食べテレビを見て寝る。サムの徳用Eマートが、かりに

道路の向う側にあったとしたらいまは何をしているだろうと思うことがある。あの道路には、四ブロックのあいだ、向うがわのブロックで言えば六ブロックになるが、そのあいだ横断歩道がないから、あの店へはぜったい行かなかっただろう。それがここに越してきたあくる日、冷蔵庫につめこむものを母親の車で買いにいって、**レジ係募集**のあの看板を見た。で、けっきょく看板は三十分間たっていただけということになった。この仕事にぶつからなかったら予定どおり自分の車を買ってダウンタウンで仕事を見つけていただろう。でも車はたいしたことじゃあない。時機がくれば買えるだけのものはじゅうぶん貯めてある。ほんとうは市内に住んで車などもたずにすめばいいのだけれど、母親が市内に住むのを怖がっている。歩いてかえるみちみち車を眺めながら買うときがきたらどんな型のやつを買おうかと思案する。もともと車にはあまり関心はないのだけれど、進学をあきらめた以上いずれは金をなにかに使わなければならない。それで帰り道にいつも同じことを考えるのがならわしになっている。もううんざりだった、一日じゅう、売る品物と、そいつの代金をいじっていて、しまいには手がほかのものをつかまないので、頭もほかのことはなにも考えなくなる、かといってそれをずっと考えつづけているわけでもなかった。

ここへ移ってきたばかりの早春のころは、歩いてかえるみちみち家並みのうえの空は、つめたい緑と金色に照りかがやいていた。いまは夏、樹一本ない街路は七時になってもまだ明るくて暑い。南に十マイルはなれた空港からとびたった飛行機が、ぎらぎらした空を切り裂く、影と爆音をひきずりながら。車よせの近くにペンキ塗りのスチール製の組立てジムがおいてあって、こわれたぶらんこがぎいこぎいこ音をたてている。ここはケンジントン・ハイツと呼ばれている住宅団地だ。樫ヶ谷（オークバリー）通りに

出るには、ローマ・リンダ通り、ローリー通り、松見台(パイン・ビュー)通りを突っきって、ケンジントン通りを折れ、チェルシー・オークス通りをわたる。丘(ハイク)もなければ、谷(バリー)もない、ローリーさんもいなけりゃ、樫(オーク)の木もないのに。樫ケ谷(オークバリー)通りにならんでいる家は、二階だての六軒つづきの共同住宅で、茶色と白のペンキ塗りだ。カーポートが並ぶあいだに、白ペンキを塗った砕石でふちどりした猫のひたいほどの芝生があり、ビャクシンが植わっている。ガムの包み紙、清涼飲料水の罐、プラスチックのふたなど、彼がカウンターであつかっているたぐいの品物の処理できない容器や残骸が、白い石と黒々した植木のあいだにころがっている。ローリー通りと松見台(パイン・ビュー)通りに並んでいる家は一戸建て風の共同住宅で、ローマ・リンダ通りになると完全な一戸建てだ、これは車よせ、カーポート、芝生、白い石、ビャクシンつき。歩道は平坦、道路は水平、およそ起伏のない場所だ。古くからある街、ダウンタウンは河ぞいの丘に築かれたけれど、東寄りと北寄りの郊外の町は平坦地にある。眺めらしいものといえば、引越しの貸しトラックで東からここへ入ってきた日に見たあれだけだ。市の境界標識の直前でハイウエイが陸橋をわたるようになっていて、車が登ってそこにさしかかると、広々とした畑が見える。畑のむこうに金色のもやにつつまれた市街がある。やわらかな夕日をあびる畑や草原、そして樹々の影。すこしいくとハイウエイにむけて極彩色の看板を出しているペンキ工場があらわれる、そこから住宅団地が広がっていた。

店が退けたある夕方、暑い夕方、サムの徳用Eマートの広い駐車場を突っきって出口のランプをのぼり、ハイウエイわきのせまい歩道に出て、トラックの上から見たあの畑、あの田園に歩いていかれる道はないものかとさがしてみたのだが、そんな道はなかった。紙くずや金ものやプラスチックのゴ

ミが足もとに散乱し、トラックが近づいてきては通りすぎていくたびに、つむじ風がまきあがり空気がかき乱され、地面がゆるぎ、轟音が鼓膜をうち、タイヤのこげる臭いとジーゼルの排気ガスしか吸うものがないのだった。三十分歩いてみて断念し、ハイウエイから出ようと思ったけれど、路肩に金網のフェンスがめぐらしてあって、住宅地へは入りこめないようになっていた。ケンジントン通りに出るには、来た道を引きかえして徳用Eマートの駐車場をもう一度突っきっていかなければならないのだ。この挫折が身体を顫わせ怒りをかきたてた、まるで暴行をうけたみたいに。正面からかっと眼を射る夕日に眼をほそめ家まで歩きつづけた。カーポートに母親の車はなかった。家に入ると電話のベルがなっていた。

「いたわね！　さっきからずっと電話してるのに。どこにいってたの？　もうこれで三度目だわよ。十時ごろまでここにいるから。ダービナのとこ。冷凍庫にターキー・ディナーがあるから。オリエンタル・ディナーは食べちゃだめ、水曜の分だから。ミクソンのターキー・ディナーだからね」一ドル二十九セント、チーン、頭のなかでレジがなる、まいどありい。「六チャンネルのあの映画だけど、はじめのところが見られないから、あんたかわりに見ておいて、あたしが帰るまで」

「いいよ」

「じゃあね」

「じゃ」

「ヒュー？」

「え」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「どうしてこんなにおそくなったの？」
「ちがう道とおってかえってきたから」
「いやにつんけんしてるんだね」
「そうかい」
「アスピリンでものんで。冷たいシャワー浴びて。ひどい暑さだもの。あたしだってそうしたいところ。おそくはならないつもりだけど。用心してね。外へ出るんじゃないわよ、わかった？」
「ああ」
母親は言いよどんで、無言のまま、電話を切ろうとしない。「じゃあ」と彼は受話器をおき、電話台のそばにじっと立っていた。気分がおもい、図体の重い動物になったような、ずんぐりした皺くちゃの生きもの、下唇がだらんとたれて足がトラックのタイヤのような生きもの。どうして十五分もおそかったどうしてそうつんけんしてる用心おし冷凍のオリエンタル・ディナーは食べるんじゃない外へは出かけるな。わかったよ。用心おし用心おし。キッチンへいってミクソンのターキー・ディナーをオーブンに入れた、あらかじめオーブンをあたためておくことという指示は守らなかったけれど、タイマーはセットした。空腹だった。いつも空腹だった。ほんとに腹がすいているというのではないがいつも食べたいのだった。食器棚にピーナッツの袋が入っていたからそれをもって居間にいきテレビをつけてアームチェアにすわった。重みで椅子が揺れ、ぎこぎこといった。ふいに立ちあがった、あけたばかりのピーナッツの袋が床におちた。あんまりだ、象がピーナッツを食べてる。自分の口がぱくんとあいているのがわかる、肺の中に空気がおくりこめないみたいだ。なにやら出てこようとし

ているものがあって、そいつが喉をふさいでいる。椅子のわきにつったって、がくがく顫えていると、喉にひっかかっていたものが言葉になってとびだした。「いやだ、いやだ」とそいつは大声で言った。

仰天し、恐怖にかられ、玄関のドアに突進してノブをもぎとる勢いであけて家をとびだす、そいつがしゃべりださないうちに。灼けるような西日が白い石、カーポート、車、家の外壁、ぶらんこ、テレビのアンテナにぎらぎら照りつけている。彼はそこに突っ立って顫えている、あごが痙攣している。そいつはあごをこじあけて、もう一度しゃべろうとやっきになっている。やにわに彼は走りだした。樫ヶ谷通りを走って、左に折れて松見台通りに出て、それから右へ折れて、もうわからない、道標が読めない。ふだん、めったに走ることもないし、得手じゃないのだ。足が地面を強くけるたびに、ずしんと衝撃がつたわってくる。車もカーポートも家並みもぼやけて目もくらむようなぎらぎらしたものに変じて、走るうちにそれは赤くなり、そして黝くなった。眼の奥にいる言葉がこういった、オマエハ日ノ光リカラ逃ゲダシテイルンダゾ。喉や肺に入りこんでくる空気はひりひりと灼けつくようで、吐く息は紙を引き裂く音がする。あの黝いものは血のように濃くなった。足ががくがくしてくる、駈けおりている、下り坂を。速度をおとそう、止ろうとしてみた、足もとの大地がすべりだして粉々に砕けてしまうような感じ、多種多様な、感触のしなやかなものが顔をなぶるような感じがする。木の葉、黒ずんだ葉叢、木の枝、泥、土、腐葉土が見える、匂いがする。そして心臓の鼓動と荒い息づかいのあいまに、音楽が高らかに鳴りつづけている。よろよろと足をひきずって数歩あるき、よつんばいにはいつくばった、そして地面に、流れのほとりの岩の上にうつぶせに長々と伸びた。

2

ようよう起きあがったときほんとうに眠っていたとはおもえなかったが、でもそれは目覚めのときのようだった、静寂の中の深い眠りから目覚めたようだった、自分は完全に自分のものであり、なにものもそれを動かすことはできないのだ、はっきりと目覚めるまでは。静寂の底にせせらぎの音があった。手の下では砂がさらさらと岩をすべっていく。起きあがってみると、空気がらくに肺に入りこんでくるのがわかった、ひんやりした空気は土と朽ち葉と若葉の匂い、さまざまな雑草、野草、灌木、大木の香りがする、水の清冽な匂い、土のじめじめした匂い、なにとはっきり言えないけれどもなつかしい甘い、つんとする匂い、あらゆる匂いがいりまじり、だが布目の糸のようにひとつひとつが鮮明で、脳髄の嗅覚器官がいまなお健在であることや、なにとは名指せないけれども、田園の夏の夕暮の、川のほとりの、この暗鬱な、まったく体験したことのない、それでいてなつかしい、深々とした匂いを構成するあらゆる匂い、香気、芳香、臭気などをとりいれられるほど彼の器官にはまだゆとりが残されていることが立証されたのだった。

なぜなら彼は田園にいるからだった。どれほど遠くまで走ってきたのやら、何マイル走ったのやらさだかではないけれど、通りやら住宅街からは遠くはなれ、舗装された世界から土の世界へやってきたことだけはたしかだった。暗く、かすかな湿りけがあり、不揃いで、錯雑したものが、信じられぬほど渾然一体として——指をすべらせて砂の粒、土の粒に触れる、朽ちた葉、小石、半ば埋れた大き

い石、根っこに。腹ばいになって顔を土に触れる、それに埋める、頭がすこしくらくらする。息をふかく吸い、広げた手のひらを土に押しつける。

まだ暗くはなっていない。眼がなれてはっきり見えるようになった。色濃いものや、翳にはもう夜がしのびよっているけれども。黒々とした枝のあいだから見える空は色蒼ざめて、太陽が沈んだあたりを示すような光りのうつろいも見あたらない。星もまだ出ていない。川の幅は二、三十フィート、川床は大小の石がいっぱいで、岩のまわりに光りがおどっている、まるで頭上の空よりもいきいきした空を切りとってそこにもってきたように両岸の広々した砂地は明るい。ただ樹の生いしげっている下流のあたりは夕闇がおもくたれこめて細部をぼかしている。

顔や髪の毛についた砂や枯葉やクモの巣をはらいおとした、小枝のさきでこしらえた眼の下の切り傷がひりひりする。片ひじをつき体をのりだし、左の手のひらで川の水にじっと触れてみる。はじめは手のひらを広げてほんの軽く、動物の肌に触れるように。思いきって手をつっこむと水の抵抗がまるで筋肉であるかのように手のひらを圧してくる。やがて一段と身をのりだし、うつむいて砂地のへりの浅瀬の水を両手にすくってのんだ。

水は冷たく、空の味がした。

ヒューは泥まじりの砂地にしゃがんで、頭をたれたまま、くちびるや口では味わえぬものを味わっていた。それからゆっくり背中をのばし、頭をあげてひざをつき両手を腿にあてて身じろぎもしなかった。頭が言葉でいいあらわせないものを、肉体は完全に苦もなく理解し、そして讃美した。

祈りだとさとったあの緊張が弱まりうすらいで、ふたたび警戒心と多種多様な愉びに変ると、彼は

しゃがみこんで、いままでより鋭く入念にあたりを見まわした。
北はどの方角なのか、陰影のない無色の空の下ではわからない。だがたしかなのは、郊外の住宅地も、ハイウエイも、市街もみんなすぐ背後にあるということだ。彼がたどってきた小径が、あそこからのびてきている、木膚が赤味をおびた松の大木と、大きな葉をつけた丈のある灌木のしげみのあいだから。しげみのむこうで径は急なのぼりになり、その先は木立の下の濃い夕闇にのまれて見えない。
川はその径の軸を右から左に横ぎっている。上流のほうは遠くまで見とおしがきいて、樹や岩のあいだを迂曲しながらのびていく土手の行手は水面に高くせりだしている。下流は木立がしだいに低くなって夕闇にとけこみ、木の下闇を流れる水がちらちら光りをすべらせている。両岸はゆるやかにせりあがった土手で、それがたいらになった先は林間の空地、せまい草原といったおもむきだが、草深く、やぶや灌木のしげみがあちこちにがんばっている。
なにか思い出せないけれどなじみのある匂いがしだいにきつくなって、手にもその匂いがうつっている——そうか、ハッカだ。さっき手をついた水辺の雑草のしげみは野生のハッカにちがいない。葉っぱを一枚ちぎってかいでみる、それからかんでみる。ハッカアメみたいに甘いものと思って。ひりっとして、ちくちく毛があって、土くさく、冷たかった。
いいところだな、とヒューは思った。それにおれが見つけたんだ。とうとうどこかにたどりついたんだ。やったぞ。
背後には、オーブンの中のディナー、セットしたタイマー、だれもいない部屋でテレビがわめいている。鍵のかかっていない玄関のドア。しめてこなかったかもしれない。どのくらいの時間？

母親は十時に帰ってくる。

どこへ行ってたの、ヒュー？　散歩だよだってうちに帰ってきたときあんたがうちにいなかったからさどんなにあたしがああ思ったよりおそくなっちゃって悪かったねだってうちにいなかったじゃないの——

彼はもう立ちあがっていた。だが口の中にはハッカの葉がのこっている、手はぬれている、シャツやジーンズは枯葉だらけ湿った砂だらけだ、だが心に乱れはなかった。おれがここを見つけた、だからいつでも戻ってこられる、彼はそう思った。

さらに一分あまり、石をかむ瀬の音に耳をすまし、夕暮の空に張りついて動かない梢を見つめた。それからきた道をひきかえし、高い灌木のしげみと松の大木にはさまれた小径をのぼっていった。はじめのうちは急なのぼりで暗かったけれど、やがて平坦になり、木立もまばらになった。歩きやすいとはいっても、急速に濃くなっていく夕闇の中でブラックベリーのとげのあるツルに二度ほど足をとられてしまった。地面のほんのくぼみか皺といったおもむきの、草におおわれた古い溝、それが森の境界だった。そのむこうは広々した畑だった。畑のはるかかなたを、ハイウエイの車のライトがちらちらと狐火のようによぎっていく。右手のほうにはじっと動かない明りが見える。それを目ざして、枯草の畑と、かたい畝の土を踏んで突っきっていくと、とうとう土手のような小高いところにたどりつき、そこは砂利道がついていた。左手の、ハイウエイに近いところに、こうこうと明りのついた大きな建物がある。道の下手には、農家とおぼしい家が二軒たっている。一軒のほうの庭さきに照明灯がついていたので、それを目あてに進んだ、そう進めばいいのだと、二軒の農家にはさまれたこの道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.